

鎌倉楽しむ会

令和二年初夏の小話



輪王寺宮公澄法親王
(りんのうじのみや
こうちようほつしんのう)
揮毫の「鳩字の扁額」
*畳三畳の大きさ!!

一、善光寺如来縁起の「昔話」資料

一、崇佛論争（西暦552～587）に関する資料

一、崇佛論争当時の朝鮮の参考地図



“仁王像”

高村光雲・米原雲海の合作

*高さ「5, 3
メートル」

参考文献

日本の民話善光寺

神社検定公式テキスト「日本書紀」編

PCウィキペディア

鎌倉楽しむ会

企画責任者 清藤 孝記

善光寺如来縁起

昔、お釈迦さまご在世当時インドの毘舍
利の国に月蓋という一人の長者がおった。

この長者は大変欲が深く、仏を信ぜず欲
だけにとらわれた生活の毎日であつた。

お釈迦さまは、なんとかこの長者の心を
直し、幸にしてやろうと、弟子を遣わしお
釈迦さま自らもその門をたたかれた。

お釈迦さまの来訪に、さすがの長者もび
つくりして、黄金の鉢にごちそうを山と盛
つて出迎えようと思つたが、今日供養すれ
ば、お釈迦さまは毎日やって来るにちがい
ない。供養などせぬ方がよいわと、急にい
つもの欲心を起こし、門を閉じてしまった。
その頃、国中に悪い病気がはやり、多く
の人々が死んでいった。

長者には十三歳になる一人娘がおった。
名を如是姫といい、長者はこの娘をことの
ほか可愛がつておった。しかし、その悪い
病気は如是姫にもうつり、姫の命はあすを

も知れぬ重病になつてしまった。長者は、
国中の名医を呼び手当したが、何のききめ
もなかった。長者は、姫の命にはかえられ
ず、この上は御仏にすがるほかないと、恥じ
をしのんで今までの強欲の罪をざんげして、
お釈迦さまのもとに行き、合掌、礼拝して
姫の命をいとし、心から仏の道を信じ教え
を乞うた。

お釈迦さまは「この疫病に悩む者は、
前世の業ゆえ、いかんともしがたいが、た
だ一つ西方極楽浄土の阿弥陀如来を信じ、
阿弥陀、観音、勢至の大慈大悲によつて、
一切衆生の苦難を救つてやるがよろう」と
言われ長者に一心に念仏を唱えるように
教えられた。

長者は、お釈迦さまの教えによつて香華
灯明を供え、西の方に向かつて心をこめて
偈文を唱え祈つた。すると、阿弥陀如来は
観音、勢至の二人の菩薩様を連れ、長者の
家の前に立たれ大光明を放たれると、猛威
をふるつた悪疫もたちまちにしておさまつ
ていった。

さすがの長者も、如来様の功德をまのあ
たりに見て驚き、喜び、心をこめて如来
様に供養した。長者は、この靈験あらたか
な三尊仏の御姿を写しとどめて、礼拝供養
したいとお釈迦さまに願ひ出た。

お釈迦さまは長者の願ひを許され、神通
第一の目蓮尊者を竜宮城はおつかわしにな
り、閻浮檀金を竜王からもらひ受け、これ
を長者にお授けになられた。

長者はありがたく拝して家に持ち帰り、
これを玉の鉢に盛り祈ると、こつぜんとし
て空中に三尊仏が現れ、燃えるような光明
がお釈迦さまと阿弥陀如来さまお二人の
眉間から放たれると、玉の鉢に盛つてあつ
た閻浮檀金はとけて、三尊仏の御姿がお生
まれになつた。

長者は喜びつつしんで終生この三尊仏
に仕え、世のため国のために奉仕したとい
う。

それから五百年の間、三尊仏はインドに
おられたが、その後、朝鮮の百済に渡り、

百済に長くどまられたが、時の聖明王にお告げがあり「日本の人々を救いたい。」とこのお告げにより、我が国の欽明天皇に献納された。

第二十九代欽明天皇は蘇我氏・物部氏の二人を呼び、この御仏をどのように信奉したらよいか相談なされた。

蘇我氏は大切にお迎えすべきと答えたが、物部氏は異国の蕃神は拝むべきではないと反対した。このため欽明天皇は、この御仏を蘇我氏に与えられた。蘇我氏は向原の家を改造して如来さまを安置し供養につとめた。その後、国内に悪疫がはやった。

物部氏は『これは日本の神々がお怒りになったのじゃ。』と口実をもうけて、蘇我氏が如来さまを安置した向原寺を焼討にしたが、不思議なことに三尊仏は少しも変りなく光り輝いておられた。物部氏は今度は鍛冶屋に命じて打ちつぶそうとしたが、傷一つでしななかった。そこで、ついに三尊仏を難波の堀江に投げ込んでしまった。

その後、聖徳太子は難波の堀江に行かれ、

沈まれた三尊仏が上がられることを祈られると、如来さまは水面に浮かび上がられ、『我れ考えるところあり、今しばらく水の中にあって時を待つなり。』と仰せられて、水中深く隠れてしまった。

その後、信濃の国伊那郡麻績郷の本田義光という大変正直な人が、国司の供をして都へ上ったおり、難波の堀江を通りかかると『義光、義光』と堀の中から呼ぶ声があった。見ると如来の像が現れて「我は一光三尊の阿弥陀如来なり、汝が故郷信濃の国は、我有縁の地なれば負いて帰るべし」と仰せられた。

義光は喜んで如来さまを堀の中から上げて背に負うと、信濃の国へ旅立つて行った。義光は我家に着くと、家の中で一番清らかな臼の上に安置した。それから、義光親子は如来さまのお告げにより、水内郡芋井郷（現長野市）に移して、家族ともども信心深く仕えた。

ある日、義光の子義佐が若くして死に、嘆

き悲しんだ義光らは、如来さまにすがり願うと如来は、地獄へ行かれ、閻魔大王を諭され義佐を生き返らせて下された。

このことが国中に広がり、次第に如来さまを信じ供養する者が増え、多くの人々が参詣するようになっていった。

時の第三十五代皇極天皇は、三尊如来の靈験あらたかな事を聞き召されて、義光、義佐の親子に伽藍造営の許しを下された。

義光親子は、皇極天皇をはじめ、多くの人々の信仰によつて世にもまれな大伽藍を建立し、我国最初の「三國伝来の三尊如来」はここに安置されました。

そして、義光の名をそのまま寺号として、義光寺と称し、皇極天皇の「勅額」が賜れました。

善光寺如来の靈験は全国津々浦々まで知れわたり信仰を大いに集めるようになりました。時を経て、寺の名はいつしか善光寺（ぜんこうじ）と呼ぶようになったということです。

（古墳時代）

一、我国と朝鮮国との関係

古事記や日本書紀には、ヤマトタケルの皇子・仲哀天皇とその後・神功皇后の時代から朝鮮との間には、さまざまな関連記事が見られます。

今回は神社検定公式テキスト「日本書紀」編の文中から関連文を抜粋し列記してみます。

「第十四代仲哀天皇紀」

仲哀天皇九年（西暦二〇〇）、天皇一行は九州の熊襲征伐に遠征します。その時、皇后の神功皇后に神が降りて「熊襲を討つことはない。これにまさる宝の国・新羅があるから、我を祭ってこれを服従せしめよ」との神託を受けます。しかし、天皇はこれを疑ったがため突然崩御してしまいます。神功皇后は、天皇の亡くなった場所に「櫛日

宮」（現在の福岡市東区・香椎宮）を祭ります。そして、軍船を率い対馬を経て新羅に至り、高麗・百済をも朝貢させるようにした。

神功皇后摂政四十六年（西暦二四六）、この年から、しきりに百済からの使者が渡来し、我国への恭順の意を表します。それ以降、百済は日本の同盟国として、その滅亡まで友好的な関係が続きます。

神功皇后摂政五十二年（西暦二五二）には、百済から「七枝刀」をはじめとする重宝が献上されました。（現在、奈良・石上神宮に伝来している国宝・七支刀は、この時のものとされ、この記事を裏付けるものとなっています。）

「第一五代応神天皇紀」

応神天皇十四年（西暦二八三）には百済から「弓月君」が渡来します。これは秦氏の祖となります。次いで翌年にも百済から、「阿直岐」が遣わされ、経典をよく読んだ

ので、皇太子・菟道稚郎子の師としました。その推薦によって「王仁」も渡来し、やはり太子の師としました。応神天皇二十年（西暦二八九）には、「倭漢氏の祖・阿知使主」も渡来しました。

「第十九代允恭天皇紀」

允恭天皇元年（西暦四一二）允恭天皇は重病だったので即位を躊躇しますが、妃のおおのかつひめ、大中姫の強い要請により皇位に即きます。新羅から良医が来て病は快癒します。

「第二十一代雄略天皇紀」

雄略天皇の五年（西暦四六一）、百済から逃れてきた「蓋鹵王」の妻が、筑紫の各羅嶋（加唐島・佐賀県唐津市）で「嶋君」（後の百済の第二十五代の王・武寧王）を生みます。嶋君は百済へと送られました。雄略天皇十五年（西暦四七二）、秦の民の管理を任された「秦酒公」は、大量の絹を

天皇に献上けんじようしました。これによって

「禹豆麻佐うづまさ」（太秦うずまさ）の姓を賜いました。

「第二十三代額宗天皇紀」

額宗天皇の三年（西暦四八七）二月、仁

那（みまな）に遣わされた阿閉臣事代が、

月神つきのかみ

の託宣を報告し、山背国の田地が月神

に奉られます。これが、松尾大社まつお撰社の月読

神社（京都市西京区）の創紀そうきであると考え

られています。

「第二十五代武烈天皇紀」

百済では、日本で生まれた嶋王せまさしが即位し

て武寧王むねいおうとなり（西暦四九九）、朝貢してき

たことが見えています。

「第二十六代継体天皇紀」

継体天皇の六年（西暦五一二）、仁那四県みななが

百済に割譲かつじようされますが、これには

大伴金村が百済から賄賂わいろを受けたとの噂が広まり、のちの失脚の原因になります。

翌年には、割譲の見返りとして百済から五経博士ごきようはくしの「段楊爾だんように」が貢上されました。

五経博士とは儒家の經典である五経（『詩』

『書』『礼』『易』『春秋』）を教え研究する官僚のことをいいます。

二十一年（西暦五二七）、新羅の攻撃を受け

た百済救援のため、六万の軍勢を送ります

が、筑紫国造磐井ちくしくにのみやつこいわいが新羅と結んで反乱を

起こし、救援は頓挫とんざします。

（飛鳥時代）

「第二十八代宣化天皇紀」

宣化天皇二年（西暦五三七）新羅が仁那

に侵攻してきたので、大伴狹手彦を遣わし

助け、百済も救援しています。

「第二十九欽明天皇紀」

欽明天皇元年（西暦五四〇）、物部尾輿もののべおこしな

どにより、これまでの失政を弾劾だんがいされて、大伴金村は隠退します。四年（西暦五四四）、

百済の聖明王せいめいおうは、仁那諸国の王を集めて復興を協議し、敵対する新羅に通じている仁

那日本府の官人を帰国させることを請願します。翌年、聖明王は仁那復興の策を示し

て日本の救援を要請します。その間、百済

は高句麗こうくりの侵攻を撃退したので、救援は止

められますが、十二年、再び新羅・高句麗の連合軍に攻められたので救援を求めてき

ます。

そして、翌十三年（西暦五五二）、聖明王

から「釈迦仏の金銅像一体、経論若干」な

どが贈られました。これが『**仏教の公伝**』
と言われます。

しかし、

＊「上宮聖徳法王帝説」と

「元興寺縁起」には

「**仏教の伝来**」は西暦五三八年

と記されており、

現段階ではこちらの説が有力

とのことです ＊

二、崇佛論争の始まり

欽明天皇は、聖明王から贈られたこの金銅像を敬うべきかを悩み、その可否を重臣たちに問うたところ、大臣・蘇我稲目は、「諸国が既に信仰しているのに、わが国だけ背くことはできません。」と答えます。

それに対し、物部尾輿・中臣鎌子は、「わが天皇は常に百八十の神々を祭ることを務めとされている。今、改めて蕃神を敬うなら、わが国の神々の怒りを招くでしよう」と述べました。蕃神とは外国の神のこととで、ここでは「仏」を指しています。天皇は、試みに稲目に祭らせ、稲目は自分の家を寺とします。

しかし、疫病が流行したので、尾輿・鎌子は仏像を棄てることを進言して許され、仏像は難波の堀江に流し棄てられ、寺も焼かれました。

その後、聖明王は、なおも仁那復興に力を尽くしましたが、十五年（西暦五五四）

に新羅との戦いで敗死し、二十三年（西暦五六二）には、仁那も新羅に滅ぼされてしまいます。そのことは衝撃を与えたと共に、多くの渡来人が日本に帰化したことを「欽明天皇紀」は伝えています。

「第三十代敏達天皇紀」

敏達天皇十二年（西暦五八三）、仁那復興のために百済から日羅が召され、さまざまな献策をしますが、百済人に謀殺されてしまいます。なお、この日羅については、平安時代末期に成立したとされる『今昔物語集』などでは、聖徳太子が師事した高僧と伝えています。

十三年（西暦五八四）、蘇我馬子が司馬達等の娘・嶋（善信尼）など三人を出家させて尼とし、仏殿を造営し、仏法を興しました。しかし、また疫病が流行し、物部守屋は仏を崇めた祟りであると上奏し、仏殿を焼き仏像を難波の堀江に投じます。

しかし、天皇と守屋が急病となり、人々

も「瘡」（疫病）に悩まされたので、馬子は仏法を天皇に勧め、天皇もこれを許して、再び仏殿が営まれます。この敏達天皇の崩御後には、なお馬子と守屋の反目が記されています。

「第三十一代用明天皇紀」

用明天皇二年（西暦五八七）、天皇は群臣に仏法への帰依を宣言し、物部守屋・中臣勝海はそれに反対し、蘇我馬子は賛成して、物部氏と蘇我氏の対立がさらに深まります。そして、蘇我馬子が策謀し、厩戸皇子（聖徳太子）などと協力し、仏法の諸天王などに誓いをたて、仏法の加護も得て物部守屋を滅ぼします。

（崇佛論争の終焉）

「第三十二代崇峻天皇紀」

崇峻天皇即位（西暦五八八）後、馬子が法興寺（飛鳥寺）を創建し、多くの者が出家します。

鎌倉楽しむ会 「崇佛論争」の資料

古墳時代から飛鳥時代にかけての朝鮮の地図（ウィキペディアより引用）

鎌倉楽しむ会 「崇佛論争」の資料

古墳時代から飛鳥時代にかけての朝鮮の地図（ウィキペディアより引用）

